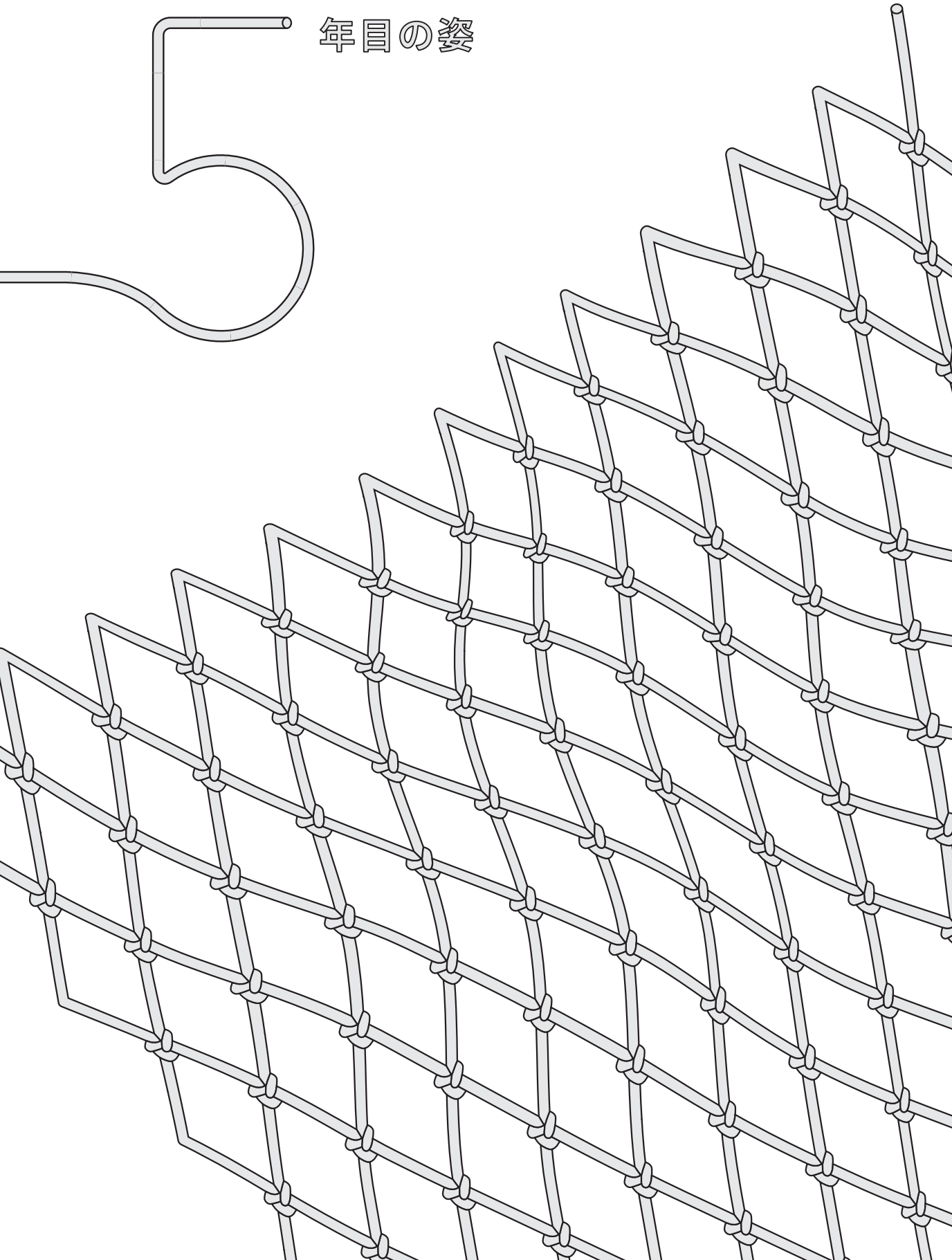
5 年目の姿



もくじ	ページ番号
はじめに	2
ブロック研修会	3
舞台美術	11
最も自由な人たちVOL.08– Get excited at home! -	12
ジャパン・ミュージックブリュット・フェス vol.2 Do It !!〜おめーら熱苦しいんだよっ!〜	16
スタ☆タン!Z全国ツアー　ーAcross the Chaos ー	19
純粋にパフォーマンスを楽しむ日	26
相談支援	30
評価	34
今後の展望	36
終わりに	38

はじめに

令和3年度も前年度に引き続き、新型コロナウィルスの影響を大きく受ける1年になってしまいました。大きく分けて7月～9月、1月～3月に新型コロナウィルスの感染が猛威を振るい、東海・北陸ブロック内の支援センターの関係者からも感染者が続出しました。

広域センターとしても、県をまたいだ移動を躊躇する場面が多々ありました。計画どおりの事業を実施することができるか不安でしたが、ブロック内の支援センター、関係機関の方々の多大なご協力のもとほぼ予定通り遂行することができました。本当に多くの方々に支えられ、広域センターが運営できていることを改めて知りました。

平成29年度より5年間、広域センターを運営してきました。令和3年度は節目の年となり、ブロック内全8県で支援センターが開設されました。平成29年度の時点では、1県のみの設置であったことを思い返すと、本当ににぎやかなブロックになったと嬉しく思います。年々、この事業に関わる方も増え、各県で独自性のある障害のある方の表現活動を推進する施策が取り組まれています。多様な取り組みが各県で行われるようになったことで、広域センターに寄せられる相談もより専門的で幅の広い内容になってきました。これまで我々としては、支援センターに対して中間支援組織としての基盤整備に注力してきましたが、基盤が整いつつある状況の中で広域センターの役割も変化の時を迎えています。

広域センターの責任者として、年々能力の限界を感じています。これまでのキャリアの中で培ってきた経験を切り崩しながら事業を実施してきましたが、もうそろそろ引き出しもなくなってきました。将来に亘って、よりこの事業を発展させ持続させていくためには『持続しない』ことも大事なことなのではと思っています。

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
センター長　坂野 健一郎

ブロック研修会

日時	内容
7月27日（火）	内容：障害福祉諸施策の理念や動向から障害のある方の表現活動を支援する意義を学ぶ
	講師：元厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活支援推進室虐待防止専門官
	(福) みんなでいきる障害福祉事業部長　片桐 公彦
	障害福祉施策の制度の全体像の概略と職員の人員配置等、福祉現場の実態を学ぶ機会となった。また近年の福祉施策の動向から、なぜ障害のある方の表現活動を支援することがその方の人権の尊重や日々の暮らしの豊かさにつながるかを伝えてもらった。現場職員の日々のケアの中に、文化芸術の視点が入ることで利用者の行為の捉え方も多様になるのではというアドバイスをもらった。
8月26日（木）	内容：文化諸施策の理念や動向から、地域における障害者の芸術文化活動の普及啓発の方法を読み解く
	講師：同志社大学経済学部経済学科　教授　太下 義之 氏
	2000 年以降、急激に我が国の文化施策の目指す方向性が劇的に変化し、多様な価値観、多様な担い手、楽しみ方をより重視する流れとなった。そのムーブメントにおいて、生きづらさを感じている方や障害のある方も含め全ての方が文化活動の恩恵を享受できる社会づくりが求められている状況を制度の遍歴を含めて解説してもらった。『文化活動そのものが社会づくりである』ということを認識し、支援センターの業務にあたってほしいとアドバイスがあった。
9月29日（水）	内容：非営利団体・中間支援組織におけるメディア戦略
	講師：NPO 法人明日育常務理事　長井 一浩 氏
12月10日（金）	内容：オンライン配信時に留意すべき著作権のこと
	講師：Arts & Considerations 行政書士事務所　行政書士　作田 知樹 氏
	オンライン配信時のトラブルが増えてきたことから急遽、オンライン時に留意する必要のある著作権を学ぶ機会を設けた。既存の楽曲を使用するなどオンラインに関わらず、これまで悪意なく著作権を侵害にあたる舞台芸術の事例の説明から、リアル開催とオンライン時で変わる利用条件や手続き方法、また国内楽曲と国外楽曲の扱いの違いなどを学んだ。著作隣接権や原盤権など美術分野では馴染みのない権利についても学ぶことができた。
2月9日（水）	内容：障害のある方が文化芸術活動に参加する際に必要な合理的配慮について
	講師：Palabra 株式会社代表取締役　山上 庄子 氏
	様々な文化芸術活動において、合理的配慮に関わる監修を行っている山上氏より支援センターとしてどのような取り組みができるのかを学んだ。特に重要なポイントは 3 点あり、1 点目は対応できていないことを明確に伝えることも配慮の 1 つであること、2 点目はやみくもに合理的配慮をどうするべきかを考えるのではなく、参加される方の層をイメージすること、3 点目はツールやハードが揃っていても最終的には、様々な方に寄り添えるスタッフの育成と当事者の声をしっかり聴くことであった。
3月1日（火）	内容：研修という名のスタ☆タン !!
	講師：認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ　理事長　久保田 翠 氏
	職員　　曽布川 祐 氏
	職員　　高木 蕗子 氏
	パフォーマー：ゆうじんぐ 氏　さけつ 氏　にっちとさっち 氏
	クリエイティブサポートレッツが実施しているスタ☆タン !! を通じて、表現の多様性について学んだ。障害のある方の日常的に行われている行為や、何かをしたいという要求は時に問題行動として捉えられることが多いが、別の側面から見ると全力を込めた意思表示とも言える。福祉施設職員が、その全力で何かを伝えようとしている障害のある方の行為を拙速な判断で止めてしまうことに対する警鐘をいただいた。
3月25日（金）	内容：社会調査における留意点等
	講師：株式会社ニッセイ基礎研究所主任研究員　大澤 寅雄 氏
	アンケートなど調査を行う前に、調査の目的の明確化や設問設定を検討する必要性があることを認識した。漫然と調査を行うのではなく、支援センターの評価を可視化するために書面・対面・オンラインなど様々な方法を用いて適切な調査を行う必要性を学んだ。
	内容：アートリース：まちごと美術館の取り組み
	講師：まちごと美術館コーディネーター　高橋 亜紀 氏
	新潟県内を中心に障害のある方の作品を複製しアートリースを行っているまちごと美術館。月額 1 枚 3,000 円でレンタルを行っており、うち 500 円が作家の収入につながる仕組みを構築している。現在約 200 箇所の企業が絵画を借りている。契約企業を増やすために積極的な営業活動が最も必要であった。契約企業が増えてきたことから、絵画の管理運営業務の一部を福祉施設に委託している。

第3回ブロック研修会

東海・北陸ブロックではブロック内の支援センターを対象に全7回8テーマの研修会を実施しました。概ね月に1回の頻度で、各支援センターの事業を実施する上で感じている課題などを踏まえ少人数制で研修会を実施しました。報告書では第3回ブロック研修会の様子を紹介します。

趣旨： 厚生労働省：全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書によると、事業所等が障害者の文化芸術活動を推進する上で協力してもらう機関として、支援センター・広域センター・連携事務局と回答した割合は全体のわずか3.8％でした。支援センターの認知度の低さが浮き彫りになった結果となり、今後より多くの方から支援センターを活用してもらうためにどのような広報が必要なのか学ぶ機会を設けました。情報発信を行う上で現在優位性のあるツールはあるのか、また誰にどのように働きかけると効果的な広報となるのか主に2点について議論しました。

テーマ： 非営利団体・中間支援組織におけるメディア戦略

日　時： 令和3年9月29日（水）14：00～15：00

参加者： 14名

講　師： 合同会社HUGKUMI代表　長井一浩氏

講師プロフィール

社会福祉法人松阪市社会福祉協議会を退職後、平成25年4月より特定非営利活動法人明日育常務理事・事務局長として「育つ」という視点でさまざまなものごとを見て活動を展開。平成27年4月には、一般社団法人Green Down Project代表理事として、羽毛を循環資源としてリサイクルすることを企業や団体などと連携して活動を全国に展開している。また、令和3年1月からは、合同会社HUGKUMIの代表社員として、社会福祉協議会や福祉事業所の研修、コンサルティングなど新規事業のプランニングに取り組んでいる。

概　要： 支援センターは限られた人的リソースで実施していることが多く、広報専属の担当者を配置することは困難な状況と言えます。支援センターの職員が直接広報活動で動くことは困難であることを前提に、『勝手に広報を行ってくれるファン』を見つけることの重要性を伝えてもらいました。事業のファンになってもらうには、相手に事業の必要性が伝わるメッセージが必要であり、それを言語化することが広報活動で最も必要なのではと提起いただきました。

詳　細： 『つなげる。つながる。』を主題に、①広報のヒント、②大きな広報の2つのテーマについて学んだ。

パート１：広報のヒント

広報を考える

自分を知る → 相手を考える → 伝える

伝えるの前に考えるべきことがある。

あらためて考えたいこと。

- ☑ 自分たちの課題って何？
- ☑ 自分たちの強みって何？
- ☑ 自分たちって何をしている人？

など

まず、それをはっきりさせましょう！

広報のヒント！

自分のことを知らないと、自己紹介はできない。 ➡ つながる為に

知らない人のことを、紹介できない。 ➡ つなげる為に

そもそもつなげる

つながる力とは何か？それは伝える力!

相手に伝える前に知るべきことがある。それは自分を知ること。

自分たちの強みって何？、自分たちの課題って何？、自分たちって何をしている人？。自分を知らない限り相手には伝わらない。意外と自分の立ち位置や役割を明確にできていないことがある。まず、それをはっきりさせることが重要である。方法はswot分析などがある。

自分のことを知らないと、自己紹介はできないし、つながることもできない。

「伝える」その前に、相手を考える。相手のことを紹介できるか。

よく勘違いする点だが、広報の大前提は「みてもらえない」である。だからこそどうしたらみてもらえるかを考える。

広報における最大のライバルは、他の団体の広報ツールではない。時間である。様々な情報が流れている中で、目を留める時間の過酷な争奪戦である。だからこそ相手を知り何を伝えるかを考える必要がある。

『メッセージ＝目的　×ターゲット。』広報の「目的」を明確にし、「ターゲット」を明確にする。自然と伝える「メッセージ」が決まる。単純なことだが、目的とターゲットに齟齬があると、0になったり分子が小さくなってしまう。

日常のコミュニケーションでは、ほとんど反射的に「目的」「相手」「相手と自分の関係」「どう言ったらいいか」を瞬時に考えている。広報も同じ。

ライバルは、
他の団体の広報ツールじゃない。
(広報は、時間争奪の過酷な戦い)

コミュニケーション・広報のゴールは「相手を動かす」「相手の態度を変える」こと。

広報は、自分と相手のことを「考える（想像する）」作業。いろんな視点から物事をとらえ、相手に行動変容を促せるか。

広報の成功事例として、ある災害ボランティアセンターの例がある。とにかく暑い日が続き、飲料水が慢性的に不足していた。飲料水の寄付をSNSを通じて呼びかけることにしたが、この時に発信したメッセージが『熱中症対策「冷え冷えドリンク」募集』であった。熱中症対策という目的を明確にし、ターゲットはコロナ禍で移動ができない、だけど被災地に何かをしたいという思いをもった県外のボランティア経験者。またダサさはあるが冷え冷えドリンクという言葉で物を連想できるネーミングにしたことにより、瞬時に寄付が集まった。

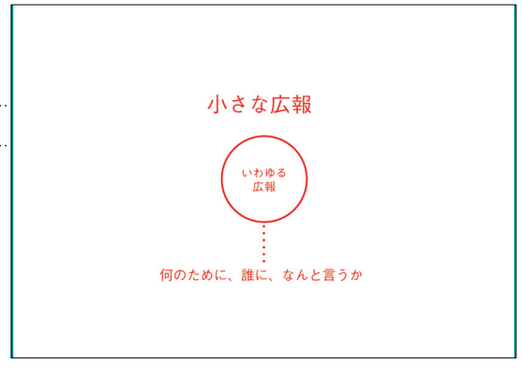
パート2 大きな広報

広報の鉄則は、発信する内容をより伝えたいことに絞ることである。伝えたいことはたくさんある。しかしながら、5つ同時に伝えた場合は1つも情報をキャッチできないかもしれない。1つだけ伝えた場合は、キャッチしやすい。集中させる物事が多ければ多いほど、人は覚えられなくなる。メッセージは一つに。

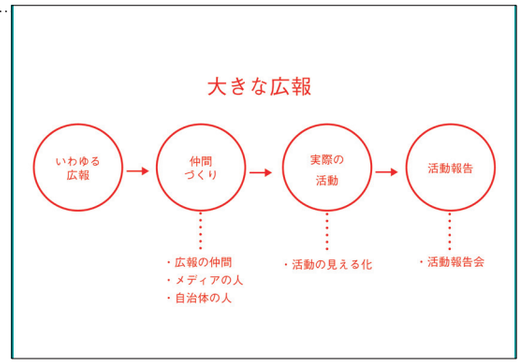
今ほど説明してきた、何のために、誰に、なんと言うかといったいわゆる一般的な広報を小さな広報とすると、大きな広報というものがある。これは小さな広報の対極的な考えではなく、広報後の効果や実績、報告までの一連の流れを含めた総合的な考え方である。

広報によって新たな仲間ができたか、広報した活動の内容が可視化されているか、最終的な効果・実績を広報の対象に伝わっているかの検証が必要である。

大きな広報の流れを一見するととてもハードルが高そうに見えるがキーワードは、「それも広報!」である。先ほど日常のコミュニケーションでは、ほとんど反射的に「目的」「相手」などを考え判断していると伝えたが、小さな物事にどれだけ意味づけられるかが大事である。



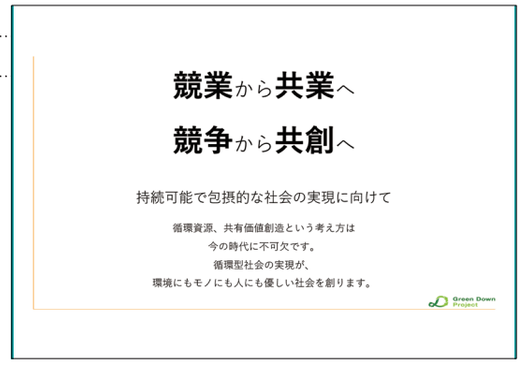
例えばプロジェクト名が大きく出ているネームプレートを50人のスタッフがつけていたとする。その50人が商業施設を巡回すれば大きなインパクトのある広報になる。イベント毎でスタッフの一体感を高めるためによくお揃いのTシャツを作成するが、それが広報につながるところまで考えているケースは少ない。そのネームプレートを付けているスタッフに声をかけてくる人がいたら広報は成功と言える。



我々の取り組みの1つにGreen Down Projectという事業がある。これは不要になった羽毛布団などを回収し、障害のある方が解体した後にダウンジャケットなどの衣服として生まれ変わる仕組みである。このプロジェクトの広報は、衣服を扱う店舗、また購入すればするほど広報先が広がる仕組みになっている。ピスネーム、吊り下げタグにはプロジェクトのロゴが大きく描かれている。また取扱い店舗全店にアンケート回収箱を設置していて、ボックスにもブランドロゴが大きく描かれている。ほとんどの店舗がレジ前に回収箱を置いているため大きな広報ツールになっている。

キーワードは、「**それも広報！**」

この取り組みを通じて、より大事だと思ったのが勝手に広報してくれる仕組みをつくることである。Green Down Projectの場合は、商品を売るためにそれぞれの取扱店が勝手に広報をしてくれる。製品製造で関わっているブランドも積極的に情報を流している。支援センターは人的リソースも少ないため、ファンが勝手に広報してくれる仕組みづくりが有効なのでは。



ファンが勝手に広報してくれるためには、事業自体の性質も変えていく必要がある。競業から共業へ、競争から共創へ。共感できるポイントを抑えておく必要がある。

すぐに共感を生む仕組みをつくることは難しい。まずは、地道に小さなところから明日からやろう。ちょっとしたことでも、伝えていくことを習慣づけていく。

明日からやろう

Q&A

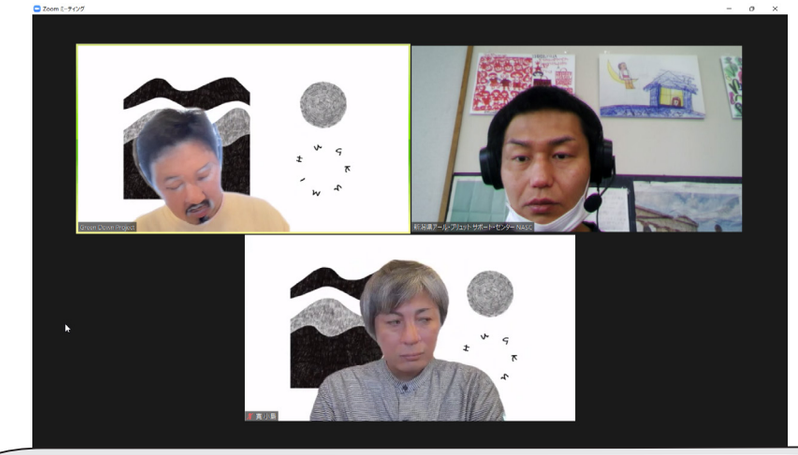
Q： 販売についての広報はイメージしやすいが、人集め、ボランテイアの募集などで良い広報の方法はあるか？

A： 地域の困りごとを自分事に変えていく伝え方が有効である。黒部市では人口と観光客の減少が課題である。そのような状況の中、コロナ禍前であったが海外から人を呼び滞在型で黒部市の暮らしを体験してもらうプログラムを実施した。その時に伝えたメッセージが一緒に黒部市を滞在型でつくっていきませんかという言葉であった。実はこのメッセージは外に向けられているようで、メインターゲットは黒部市民であった。市民の中で、この地域のために何かしたいけど何をして良いか分からない方は多数いる。また地域の困りごとに対しどこか他人事でいる傾向もある。外から呼ぶだけでなく『一緒に』というキーワードがここでは大事で、助けを借りるんじゃなく一緒にやるんだというメッセージを強くだした。協働事業に関わる方々がどんどん増え、青年会議所や富山大学の学生など様々な機関も関わった。自分事として、その事業に関わりたいと思ってもらうことがポイントだと思う。

感想

表現活動というよりも福祉施設にそのまま聞いてほしい内容だと思った。どうやったら、相手に伝わるのかの工夫。まさしく個別支援計画のサイクルとほとんど同じだと感じた。利用者の課題を把握するためにアセスメントし、解決に向けてのプラン作り、実行と。ここまでは福祉施設も一生懸命にやる。問題はこの後で、この方の地域での暮らしを実現していくために、色んな方にプレゼンしていく部分が弱い。現場のプレゼン力で、地域に共感を呼び起こしていくことが福祉現場にも求められていると感じた。

事前打合せ
日　時：令和3年9月8日（水）
出席者：合同会社 HUGKUMI 代表　長井 一浩 氏
　　合同会社 HUGKUMI 業務執行社員　小島 寛 氏
　　広域センター　坂野 健一郎　黒川 美由樹



知らない。知りたい。知ってるふり。

坂　長井さん、今日はお時間をいただきありがとうございます。初めての出会いが私がドブに落ちた研修会。長井さんの顔を見たら急に記憶が蘇ってきました。

長　落ちたな。視界から消えたな。そこに道があると思って駆け抜けたな。

坂　空中で2～3歩は進んだ気がしましたがダメでした。受け身は取りましたけど。

長　血だらけになったな。1人だけ指抑えながらしゃべっとったな。それにしても坂野君、こうやって仕事をできるのも何かの縁だね。黒部におるけど意外と会わんな。

坂　上越市社協の福祉教育事業から会ってないですね。長井さんの出身の三重県も事業の担当範囲なので、お力を借りたいと思いつつも、コロナ禍前までは色んな所に行っていて。

長　松阪、行こな。一緒に。

坂　同じブロックと思えないぐらい言葉が違いますよ。希望の園さんに行くと長井さんの出身地だないつも思います。

長　三重でも何かおもろいこと、やりたいな。東海・北陸ってブロック、訳わからん。はじめて聞いたわ。その時点でおもろい。もちろん愛知県も入る？

坂　愛知県も入ります。名古屋もあるのにこのブロックの広域センターは上越に。

長　なお訳わらんけど、それは凄いな。相変わらず、訳分らんことやっとるな。今日一緒に参加しとる小島さんは愛知県の半田市の社協出身でブロック内。

坂　元社協職員が3人。めっちゃ不思議ですね。

小　小島さんは、社協で何やられてたんですか。相談をやってました。なので、障害のある方の表現に関わる相談ってどんなのが届いているのか興味ありますね。

坂　本当ですか。相談の幅も広くなっていて後半その話もできたらと思います。じゃあそろそろ事業の説明をしてもいいですか。

長　お願いします。何しとるか知りたい。

—説明終了

坂　ざっとこんな感じの仕事をしているんですけど。

長　知らんかった。めっちゃおもろいやん。坂野、やったな。これはやったな。あっとるな、お前に。最初、アートって聞いたから坂野君のイメージがまったくつかんかったけど、こういうことか。

小　やばいですね。アートっていうか訳が分からないこともやってて面白い。事業のスキーム自体はいたって真面目だけど、捉え方が広いから枠に入らないですね。むしろ文字でまじめに書かれていることがじわじわ笑えてくる。確かに事業と照らし合わせるとちゃんとやってんだけど。

坂　そうなんですよ。私も担当してみて、めっちゃ面白いんですよ。でも誰も知らない。アンテナが高い長井さんや小島さんがこの事業を知らないことこそが実は今回の相談なんです。どうしたら存在を知ってもらえるか。

長　富山にもあんの？

坂　高岡市にあります。

長　知らんかった。こんなおもろいこと、富山でもやってんの？新潟が特別ちゃうん？

坂　富山県は露出度、高いですよ。地元テレビ局が活動をずっと追っているので。展示会や研修会もやってます。

小　観たことあるかも。でも言われてみてはじめて気づくぐらいですね。

長　僕たちが一緒にやれること、いっぱいあるよ。関わってみたいって人もたくさんおる。ただ、知らんだけ。研修までに考えるわ。どうやったら、いろんな人に伝わるか。応援したくなるもん。坂野君は、面倒くさがりやからな。やりたくないやろな。人間嫌いやし。

坂　仕事なので広報の大事さは訴えますが、頭の中の半分では伝わらない人には伝わらなくてもいいと思う自分もいます。でも仕事なんでやります。

長　闇の部分が出とるで。自称タコ漁師のお父ちゃん、めっちゃええ人やのに。まあ、伝わらない人には伝わらなくてもいいを別の見方をすると、伝えなければいけない人は探さなあかんね。すっごい大事。

坂　そんな話を研修でしてもらいたいですね。

長　よくツールがどうこうって話になるけど、流行りがあるからなんとも。マーケティングからやね。

小　マーケティングで考えると相談支援は使えるね。アート活動だけでなく、対応するか別として生活全般の話が出てくることが多いのでその中で、伝えるポイントが分かってくるかも。

坂　確かに。暮らし全体の話をしてくる方もいますね。相談員の方の不満を言う方も。ある方から、専門職ぶって、私のことを理解している風の振舞いをしている腹が立つんですよねって言われた時、なんかかっこいいなと思いました。

小　めちゃ分かる。その言葉自体が怒りの表現だよね。私も相談員をやっていた時に、当事者の方の集まりに出ていたけど、だいたい相談員への不満が出ていた。それが面白くて。あまりそういった集まりをやっている地域も少ないけど、そういった機会にこの事業の担当者がでかけていったら面白いかも。

長　いろいろ話のネタが膨らむわ。楽しみにしといて。

舞台美術

令和3年度の広域事業の重点事業として、舞台芸術の推進を掲げました。令和2年度は、コロナ禍の影響で人と人との距離が密になりやすく、発表当日までの練習の場においても感染リスクが発生する舞台芸術の取り組みが低調となりました。そのため広域センターとして積極的に舞台芸術の発表の機会をつくっていくことにしました。新型コロナウィルスの流行時期が予測できない状況でしたが、年度当初に舞台芸術の発表の機会を3回企画しました。内容の一部変更もありつつも、回数を増やし計4回実施することができました。うち3回は新型コロナウィルスの第5波、第6波の真っただ中での開催となりましたが、会場を急遽屋外に変更したり視聴者はオンラインのみの参加にするなど感染予防を徹底して実施しました。久しぶりの舞台芸術の発表の機会になったパフォーマー。音楽や演奏と触れ合う機会を求めている方。双方にとって文化芸術を楽しむ機会となり、また舞台芸術だからこそ味わえるライブ感や表現の幅の広さを改めて知る機会となりました。それぞれの実施内容を記載します。

最も自由な人たち VOL.08

- Get excited at home! -

期　　日：令和３年９月26日（日）13：00～17：00
主催共催：NPO 法人希望の園（三重県）・認定 NPO 法人ポパイ（愛知県）・東海・北陸障害者芸術文化活動広域支援センター
協　　力：Aichi Artbrut Network Center
会　　場：オンライン
視聴者数：80 名
出 演 者：ⅰ　ウゴクカラダ（愛知県）
ⅱ　青木慎太郎トリオ（三重県）
ⅲ　森 紀子（岐阜県）
ⅳ　ザ☆スクランブリング三重（三重県）
ⅴ　おといろアイランド（岐阜県）
※映像提供
ⅵ　ほほえみの木　藤巻啓介（新潟県）
ⅶ　YOHKO（新潟県）
ⅷ　チャリーとゴメス（三重県）
Ⅸ　キノコたち（愛知県）
Ⅹ　ユニコーンズ（愛知県）

趣旨

東海・北陸ブロック全域を対象としたパフォーマーの公募は初の取り組みでした。発表の機会を確保するとともに新たなパフォーマーとの出会いの場になることを目的に企画しました。特に舞台芸術の取り組みが低調である北陸地域の支援センターに対しパフォーマーの推薦・公募依頼を積極的に行いました。事業の実施方法は、一から事業を立ち上げるのではなく既に愛知県・三重県を中心に様々な舞台芸術を実施してきた認定ＮＰＯ法人ポパイ（愛知県）、ＮＰＯ法人希望の園（三重県）の協力を得て実施することにしました。当日の会場設営や企画運営はノウハウのある両団体にお願いし、広域センターとしてはパフォーマーの発掘に注力しました。

北陸地域からも、石川県および新潟県から出演希望がありパフォーマーの発掘と舞台芸術の推進につながりました。一方で、新型コロナウィルスの第５波により開催地である愛知県で緊急事態宣言が発令されたことから、県をまたぐ移動が難しくなり急遽出演を取りやめたパフォーマーが出てきました。広域センターも、感染予防の観点から会場の確認など事前準備にほとんど関われなくなってしまいました。それにも関わらず認定ＮＰＯ法人ポパイ、ＮＰＯ法人希望の園の両団体が初めて関わるパフォーマーにも適切な関わりや注意事項の説明などを行ったお陰で滞りなく事業を実施することができました。舞台芸術の運営という面においても人材育成の必要性を感じました。当日は、予定していた時間を大幅に超え熱気につつまれた1日になりました。最後は出演者勢ぞろいでステージに立ち、自由そのものでした。

藤巻啓介さんの残したもの

最も自由な人たちVOL.08の出演者を新潟県下で募ったところYOHKOさんと藤巻啓介さんが名乗り出た。藤巻さんは、自身が主催するピアサポートグループほほえみの木としてのエントリーであった。特別なことをしているわけでもないのに、藤巻さんのまわりにはいつも誰かしらがいて、彼の発する『軽やかさ』に多くの方が救われていたのではと思う。演じていない言動やその行動に、その場全体の空気も軽くなる。私自身（坂野）も立場上、大体のことはいいですよと言って断らないが、役割を演じているに過ぎない。藤巻さんを見て、真似できないなといつも思っていた。

YOHKOさんのエントリーは予想通りであったが、8月後半頃から様々な事情で私を含め広域センタースタッフとYOHKOさんとの関係はかなり悪化していてごちゃごちゃしたやり取りをしていた。一応お伝えしておくと、こちらが被害者としての側面が大きく、後日YOHKOさんも認めており謝罪をもらった。

関係が悪化している中でも電話は毎日かかってきており、出ない日もあれば「今日は良い天気ですね」を連呼するなど意地悪な対応をしたこともあった。YOHKOさんから「なんでそんなに傷つくような話をするんですか」と言われ「傷つけているつもりはないですけど、傷ついて辛いんなら電話しなければいいんじゃないですか」と返したこともある。その後、新潟市内で顔をあわせて直接対決をしたのだがそこでも平行線。

そのような状況の中、最も自由な人たちVOL.08を迎えた。私は緊急事態宣言下であったため当初伺わない予定であったが、YOHKOさんが暴走しないか気になり当日急遽リハーサルだけ様子を見ることにした。

リハーサル会場につくと、藤巻さんがすぐに気づいてくれて声をかけてくれた。

「今日、来てくれたんですね。みんな凄くレベルが高くて、来て良かったです。今日は自分のやれることを発揮します。YOHKOさんを探しているんですけど、まだ来ていないみたいなんですよ。」

リハーサルの時間が迫ってきたが中々会場に姿を現せないYOHKOさん。近隣を探してみるがいない。会場内も再度確認したがいない。これだけはしたくなかったが、こちらから電話をかけてみたがつながらない。

イライラを抑えながらもう一度会場付近を捜してみると、自転車にのった通行人の方に雨の中傘もささずに大声で会場を聞いているYOHKOさんの姿が見えた。そのタイミングで私が声をかけると、「なんでここにいるの！決して道に迷ってたわけでじゃないですからね！」と喧嘩腰で言い訳を大きな声でしてくる。これはダメだと思い、会話には参戦せずひたすらついてこいと会場まで誘導した。

リハ終了後、YOHKOさんはぶつぶつ文句を言いだした。本当は出場したくなかったと言い出してきた。私が、ああ、そうですかといった態度をとればとるほど声は大きくなる。そんな時に近くでギターを弾いていた藤巻さんが口を開いた。

「YOHKOさん、自分がどんな立場でここに来てるか分かっているの？自ら志願して新潟代表として出てんだよ。主催者の方がここまできちんと準備してくれたのに、こんな場所で騒いで失礼じゃない？誰も悪いことをしていないじゃないか。騒がず、真剣にパフォーマンスをやろうよ。」

口調はいつもながらの優しい藤巻さんそのものであったが、明らかに怒りが込められていた。藤巻さんにとって、今回が初の県外公演の機会でありこの日がくるまでに喜びの声を何度も聞いていた。だからこそ許せなかったのだろう。

このやり取りでYOHKOさんは大人しくなり、午後のステージをやり遂げる決心をした。私も同じようなことを言ってはいるのだが、藤巻さんからの言葉は違う伝わり方をした。

昼休憩時に藤巻さんとコンビニに向った。YOHKOさんとのやり取りに礼を言うと、イベント終了後、YOHKOさんが会場に居座らないようにちゃんと面倒みますので立場的にコロナに感染しないよう早く帰ってくださいと心強い言葉をもらった。私は御礼にコンビニでタバコだけ買って藤巻さんに渡し、帰路についた。

そういったやり取りのお陰で、YOHKOさんは大きなトラブルもなく見事パフォーマンスをやり遂げた。藤巻さんがいなければ、誰かを傷つける荒れた展開のステージになっていたかもしれない。藤巻さんの一言は、様々な方を救うことになった。最も自由な人たちVOL.08にも軽やかな空気が流れていたはずである。

令和3年10月10日

最も自由な人たちVOL.08の2週間後。藤巻さんに、突然さよならを告げられた。多くの方がさよならを返せなかった。私も未だにさよならを言っていいものか不思議な感覚がある。

『未完成のまま、一歩を前へ』が藤巻さんの口癖であった。一歩どころか、はるか手が届かないところに瞬時に行ってしまった。そんなところまで軽やかじゃなくてもいいのにと思う。私ができることは、藤巻さんというパフォーマーが確かにいたということを記録に残して証明していくことぐらいである。

ジャパン・ミュージックブリュット・フェス vol.2
Do it!!
おめーら熱苦しいんだよっ！

期　　日：令和３年12月５日（日）13：00～17：00
主催共催：NPO法人希望の園（三重県）・認定NPO法人ポパイ（愛知県）・東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
協　　力：あいちアール・ブリュットネットワークセンター
会　　場：Live&Lounge Vio およびオンライン
来場者数：40名
視聴者数：120名
出 演 者：ⅰ　シゲの声を聴け（愛知県）
ⅱ　sidewinder（埼玉県）
ⅲ　サルサガムテープ（神奈川県）
ⅳ　DF with ホッピー神山（静岡県）
ⅴ　ポパイ座銀河団（愛知県）
ⅵ　シェイクオブロック（兵庫県）
ⅶ　YOHKO（新潟県）
ⅷ　ザ★スクランブルーズ（熊本県）
ⅸ　ダッキーアクソン（三重県）
ⅹ　Do it!Band
MC　まなミネぴかりん（愛知県）

趣旨

東海・北陸ブロックだけでなく全国各地から音楽活動を実施している団体を招聘しフェスを開催しました。舞台芸術活動の魅力をより広く発信していくために、今後継続して実施していくシンボル的な事業として位置付けました。今回の出演者は、NPO法人希望の園（三重県）の村林信真哉理事長が調整しプログラムを作成しました。検温・消毒、体調の聞き取りなど新型コロナウィルスの感染予防を徹底した上で、観客を入れての開催となりました。

来場者やパフォーマー同士がどんどん関わり合って会場の空気感をつくっていくLIVE感は、まさしく一期一会。コロナ禍で忘れていた感覚がよみがえり研ぎ澄まされて戻ってくる、そんな1日になりました。一言で表すと『おめーら熱苦しいんだよっ！』。本当に熱かった。

出演した団体同士の交流も深まりブロックを越えて音楽活動を通じた全国的なネットワークをつくることができました。言い換えると、『暑苦しいヤツらがどんどんヒートアップしていく会場の空気もお構いなしに、叫んで騒いでさらけ出して。気が付くと一緒になって歌って踊ってた。感動や繋がり？そんな生やさしい言葉じゃ伝えきれない。伝えきれねえんだよ。なんて言っていいか分からねえ。どんな手を使ってでも、来年もここで来いよ、おめーら！Live&Lounge Vio が熱苦しいヤツらの聖地になるまで、twist and shout で続けていくぜ！』といった感じでした。

ジャパン・ミュージックブリュット・フェス vol.2 Do It! の ちょっとの振り返りと大いなる展望

出席者：特定非営利活動法人希望の園
理事長　村林 真哉 氏
南野 忠夫 氏
広域センター　坂野 健一郎

坂野　ちょっと、レコーディングさせてもらいます。

村林　どうぞ、どうぞ。いきなりなんだけど目指すは武道館だよね！やってよかったと思うよ。出演者も観客も喜んでたし。LIVEは違うよ。

坂野　熱気が凄まじかったです。武道館いいですね。報告書に載せる目標としてぴったりです。

南野　そうそう。目標としては2026年度くらいでどうですか？

坂野　後5年ないですね。

南野　一応2028年にしときますか笑。準備を3〜4年かけて、5年目で完成しましょう。

村林　いいじゃん。

坂野　だからこそDo it!!ですね。Do it!!ですよ。2028年に向けてDo it!!。この2年間、ほぼ任せっきりでなにもお手伝いしていないですけど。

村林　いやだから、今回から例えば、ちょっとずつチラシとかに武道館って名称を入れていってもいいよね。匂わせですわ。武道館行くから力つけてるんですって。

坂野　ところどころ武道館入れるって面白いっすね。素晴らしいっす。

村林　1万人のお客さんの前で太鼓でね。ドンドンってね。やってほしい。想像するだけで面白いよ。次のDo it!!で出演者に宣言させよう。

坂野　武道館行くぜって。

坂野　やってほしいっすね。あと、ダッキーアクソンの熟女ディスコも歌ってもらいたいっす。

南野　熟女ね。歌ってほしい。1万人の前でね。いや、決まったな。借りるのいくらかかるだろ。

坂野　決まりましたね。希望の園さんと、全国障害者芸術・文化祭との関わりはありますか？

村林　愛知県の大会は、ずいぶん協力したんですよ。いろんなパフォーマンスやったり、作品もいっぱい出したし。

南野　あー、なるほどね。芸術祭でDo it!!みたいな感じで。

坂野　やれたら面白いですね。

南野　全国から集まってきて音楽やって…それから武道館。みんなに武道館でやるって宣言しちゃうか？

坂野　そういえば希望の園さんが実施した、昨年のオンラインの研修の三重県の実績すごかったですよね、YouTubeの配信も。なかなか全国的にもやってないですよね。めちゃくちゃ視聴者多いですよ。

村林　マジで！チェックしていなかった。

南野　あそこまで番組として作りこんでるのはあまりないですかね。みんなこだわってやっていましたし。半分遊びでやってましたけどね。

坂野　実質、希望の園さんの実務的な体力勝負みたいなところも。

南野　その通りです。村林さん、来年度どうしよ。やる？

村林　どうしようかね。三重県のセンターからも続けてほしいって要望はあるけどね。うちのアトリエを中継するとか。あとは展示方法もQRコードなんかを活用したいね。キャプションに飛ばせたい。

南野　我々は、下請け事業なので。東海北陸ブロックの支点ですので。うちらそういう位置づけですので。違うか笑

村林　Do it!!も全部坂野さんがやりましたって言うから。僕なんですって言ってくれ。

坂野　口が裂けても言えないっすよ。

村林　あとはがっつり全国から呼びたいね。出演者がいないのは北海道、東北、あとどこだ？

坂野　四国はいたんで、あと中国ですね。

村林　2days、いっちゃう？出演者が増えると賑やかになるね。

南野　本当の意味での全国大会ですな。

開催経緯

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ（以下レッツ）が主催する「〜雑多な音楽の祭典〜スタ☆タン!!」。スタ☆タン!!とは、人々の大切にしている音の表現、音とも言い切れぬもの、いかなることも対象にするオーディション型音楽イベントです。障害のあるなしに関わらず、多種多様な「些細だけれど本人にとっては大事な表現」を表現と認め、その視点を様々な人と共有することを目的としています。今年度はスタ☆タンZ!!と題して、全国でパートナー事業者を募る形で事業展開を行うということで、本センターへ協働依頼があり、実施にいたしました。

スタ☆タンZ!! ― Across the Chaos ―

期　日：令和4年3月1日（火）13：00〜16：30
参加者：15人　パフォーマンス出演：6名
講　師：認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
代表 久保田 翠 氏
支援員 ふき子氏・曽布川祐氏

研修という名のスタ☆タン!!

新潟での現状と課題

新潟の支援センターNASCでは、スタ☆タン!!の取り組みを真似た「あしたの星」という公募型のパフォーマンスイベントの催しを2017年に行いました。それ以降、年に1度開催されおり、今年度で5回目の開催となります。しかし、1回目・2回目を通してイベントに対する集客やお金集めが課題となったことから、4回目以降は〝魅せる〟舞台として、企画の方針転換を行われました。現在は「みんなちがってみんないい！」をテーマに演奏発表、ダンス発表、ファッションショーなど行われていますが、スタ☆タン!!の理念である「些細だけれど本人にとっては大事な表現」が舞台に上がりづらい状況になっています。

そこで今回の協働事業では、スタ☆タン!!の理念を学び直す機会になればと思い「研修会としてのスタ☆タン!!」を実施、久保田代表の講演と支援員のふき子さん、曽布川さんとのトークディスカッションを行いました。

第１部　発表会のための研修会
久保田 翠さんによる講演

レッツは、久保田さんの息子、久保田 壮さんが重度障害を持っていたことをきっかけに、2000年に設立された認定ＮＰＯ法人です。ボランティア団体として始まり、2004年ＮＰＯ法人化されました。2008年より、個人を文化創造の拠点とする「たけし文化センター事業」をスタート。2010年に障害のある人、子どもが毎日通う通所型障害者支援施設アルス・ノヴァを設立します。既存の福祉事業に留まらず、さまざまな文化活動を実践、発信するレッツが2016年から始めた事業が「表現未満、」です。

「表現未満、」とは、特別な人の特別な行為を持ち上げたり、誰かのやっている行為を「とるに足らない」と一方的に判断するのではなく、その人を表す「表現」として大切にしていく文化を育てていき、それを広めていこうとするプロジェクトです。表現に優劣をつけたり、作品と位置付けることもしないで、ただ、「その人の表現」として尊重する（つまり無視しない）。これは、誰もが認められる、尊重されることと同じで、尊厳や人権にも繋がっていくと考えていると、久保田さんは話します。

表現未満の一例として、レッツに通っている水が好きな利用者さんについて、動画を見ながら説明されました。ずぶ濡れになるまで水で体を濡らし戯れる行為を、安易に問題行為として否定せずに、彼自身の表現として捉え関わっていること。水を遠ざけるのではなく、代わりの衣類を用意する支援を行なっていると言います。

参加者から久保田さんへの質疑応答（一部抜粋）

Q：「ありのままを肯定する」に至った経緯と、その中での葛藤あれば教えてください。

A：たけしは実は、入れ物に石を入れてたたき続けるだけじゃなく、「便こね」をするんですね。映像でもつなぎを着ているんですが、あれはおしゃれで着ているのではなくて、便に触らないようにという目的があるんです。問題行動が色々とあり、それをやめさせるということを12年間の学校生活の中で注力しました。けれど、それらをやめさせることはできませんでした。一人で食事や排泄を行うことも獲得できなかった。逆に唯一手放さなかったのは石遊びと便こねなんですね。そうなった時に、母親としてそれを否定することはできない、つまりそれを否定したら全人格を否定することになるから。その行為をなんとしても認めなければいけないと思ったんです。

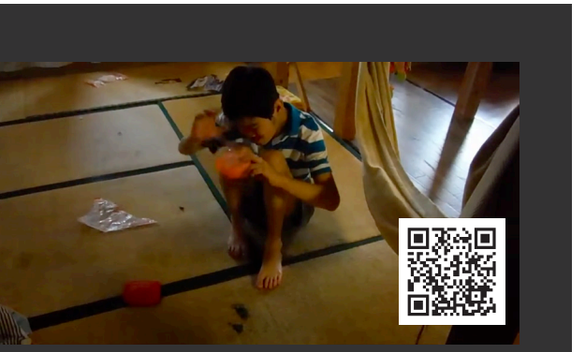
私は文化芸術によりどころがあったのが幸いでした。価値観をひっくり返すこと、それこそがアートの持つ力だと思います。一般的には問題行動でも、そこに人が存在した場合、その存在をいかに認めていくかという、問いは常に生まれます。障がい者の芸術文化に携わっている人であれば、表層の作品に注力するのではなく、福祉の支援の本髄にある「この人をどう認めていくか、どうケアしていくか」というところにアートの焦点をあてて欲しいと願っています。

Q：「たけし文化センター」のネーミングについて。たけしという一個人の名前をセンターに付けた理由や経緯を教えてください。

A：まずたけしの石を叩いて音を出す行為を「音楽」だと位置付けたのは、音楽家の片岡祐介さんなんですね。それに対して、私はむしろビックリしたんです。「たけし文化センター」というネーミングも元レッツのスタッフだったアーティストの深澤孝史さん、鈴木一朗太さんの２人が名付けました。

私はたけしの存在自体をどうしたら色んな人に認めてもらえるのかを悩み続けていました。その時に彼らが命名したのが「たけし文化センター」だったんです。障害福祉関係者からの反響や批判もありましたが、私がモヤモヤしたものを、彼らが言葉に昇華してくれたんだから、それを責任もって広めていくしかないと思えました。だから、ここはアーティストの力だと思っています。

また「たけし文化センター」という一個人の名前を元にした活動になるのですが、そこから普遍性が生まれる可能性もあると思うんですね。たけしだけではなくて、たけしと同じような立場の人。逆にみんなのために、と謳うことで誰のためにもならないということもあると思います。



たけしさんのスタタン１回目のエントリー動画（当時中３～高１のたけしさん。石をプラ容器に叩きつけて音を出す行為）

https://www.youtube.com/watch?v=jA9ZFs53f5U

Q：岐阜県障がい者芸術文化支援センターTASCからの質問

「うちのセンターの悩みとして、例えば「水をかぶるみたいな行為を他の人に見せること」について私たちは良いと思っても、障がいのある方の親御さんになかなかわかってもらえる説明ができないということがありまして…たけし文化センターの命名のとき、反対もあったと仰っていましたが、実際にはどんなことを言われたのでしょうか」

A：「たけし君はOKを出したんですか？」ということや、「全体を平等にという福祉の精神と別なのでは？」ということを言われました。前者については、「意思決定支援」という言葉がありますけど、本当は本人の意思って誰にも分からないんじゃないか？と思っています。２０年たけしと一緒に生活していますが、彼の代弁ができたと思ったことはないし、母親が代弁できるはずがないんですね。では意思をどうやってつくるのかというと、母親が決めるのではなくて、彼を愛してくれる・大切に思う人が集まってみんなで合意をとっていく。それを意思だと確認していけばいいんだと思います。そういうことをたけしくん中心にやることはむしろ福祉の支援と遠くないはずです。

また、障がいのある人たちのいいところだけ、にこにこ笑っているところだけを見せるのではなく、こういう一般的には問題行動と言われているものも見せて、それを私が自信を持って「美しい」と思うことをちゃんと伝えることが大切だと思っています。それによって「そういう見方もあるのか」と思う人がいたり、彼らに会いたいと思って来てくれる人がいたりするんです。

第２部　ふき子さん×曽布川さんによるトークディスカッション

スタ☆タン!!では障害のあるなし関係なく、全ての人の表現が対象になっています。募集チラシのイメージには支援員の高木蕗子さんがキャンペーンガールふき子として登場し、支援員もまた表現者であることを体現しています。第二部ではふき子さんと曽布川さんがそれぞれに思う「表現未満、」とは？について、レッツの日常のなかで撮影した動画をきっかけにお話ししていただきました。

「表現未満、」とは？

ふきこさんセレクト動画①

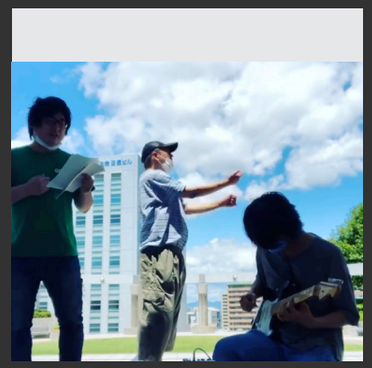
https://www.youtube.com/watch?v=hfbBxBaJHG0

先ほど久保田さんからも紹介があった、水が大好きなコウスケさんの動画です。彼は本当に水が好き、水への探究心がすごいです。いかに濡れるかを追及している。

私はレッツに来る前は自分自身のことを結構自由な人間だと思っていたんです。障害のある人に対しても「〇〇しなさい」とか、言わなくてよくない？と思っていた。でも、いざ入ってみると、「だめでしょ！」と自分が一番言っていた（笑）コウスケさんに対しても「なんで濡れるんだ〜」と怒っていました。周りのスタッフは彼を止めないし、それに耐えきれなくて、一回会議で「なんでコウスケさんを止めないんですか？」と聞いたことがあるんですよ。そしたら、逆に聞き返されました。「なんで濡れたらダメなの？なんでふき子さんはそう思うの？」って。それで戸惑いました。確かに、なんで水で濡れたらダメなんだろう、って。スタッフから、「もし服が濡れることで家族を困らせる、着替えたらいいし、洗濯したらいいよね。結局彼が困っているっていうか、ふきこさんが困っているんでしょ。」と言われました。衝撃でした。普通それで彼らの表現だなと思えるんでしょうけど、私はすぐに腑に落ちたわけでもなく、納得できるまで３年くらいかかりましたね。だんだん彼と私のこだわりがぶつかっているんだなと思うようになってきて、最近はカーッとならなくなってきましたね。

曽布川さんセレクト動画②

動画内容：曽布川さんの自己紹介を撮影したもの。



曽布川さんセレクト動画①

https://www.instagram.com/p/CSYUm3Rgt3B/

＜動画内容＞
ギターを弾く曽布川さんと利用者さんボーカルのセッション。背後で他の利用者さんが体操をしている。

「羊のクロニクルズ」というバンドの映像です。利用者の田村さんと私が一緒にやっています。スタ☆タン!!は撮る人と撮られる人、利用者と支援員は、見る見られる関係になりがちだけど、音楽はそうでない瞬間が訪れることがあります。普段、たけし文化センターの中で利用者さんと音楽をやりながら過ごしていることが多いのですが、同じもので盛り上がり、楽しんでいるのはとても幸福な瞬間です。僕の幸福が相手も思っているかの確信はないけど、その瞬間が訪れたらいいなと思いながら利用者さんと音楽をやっています。その時はすごく楽しいなと。

曽布川（以下、曽）：
レッツで自己紹介動画を撮ってくれといわれて撮った動画です。横には利用者のＫさんが並んで撮影者の方を向いています。僕は利用者の人と向き合う、対面というのがあまり好きではないんですね。

ふき子（以下、ふ）：
へー、面白いな。心理的に？物理的にですか？

曽：うーん、あらゆる意味で。向き合う関係はあまり良い関係でないと僕は思うんです。鏡っていうか・・・。鏡をみても自分が映っていない。相手が自分と違うことによって、変だと思うんです。わかります？

ふ：うーん、むずかしい・・・。

曽：（笑）基本的には向き合うのではなく、同じ方を見ていたいんですね。隣にいたＫくんですが、彼は僕のところに正面から来ることはなくて、後ろや横から来るんです、隣に座ってきたり。同じものを見る位置に来る。僕がＫくんを見るでもなく、Ｋくんが僕を見るわけでもなく。同じものを見ている。二人で見るものを作っていくと言う作業になる。それがコミュニケーションになっていて、それがいいなと思っているんです。その話をしたくて、この動画を選びました。

坂野（以下、坂）：
福祉の現場ではよく、「向き合う」「直面する」といいます。そういうのではなくて、曽布川さんの「同じ方向を見る」は、幅の広い言葉なのではないかと学びがありました。向き合ってばかりだと疲れますよね。

第３部　参加型！「スタ☆タン!!」を言葉にしてみる会

「スタ☆タン!!」では「些細だけれど本人にとっては大事な表現」を認める視点を共有するために、表現に対して批評することを大切にしてきました。そのため表現とそれに対する審査コメントが必ずセットになっています。審査員も多種多様で、過去1，2回目は音楽や表現に関する専門家、3回目は一般公募、4回目は発表者の身近な方と、評価軸そのものを拡張しようと試みています。

そこで研修会の第3部では、過去のスタ☆タン!!エントリー動画と（再演）、新潟在住のパフォーマー動画（初演）を上映し、それに対して参加者がコメント・批評してみるという時間を設けました。

「表現」を言葉にする

②スタ☆タン !! エントリー
No.34　あすなろフラガール
https://www.youtube.com/watch?v=iW70LUCxyyY

①スタ☆タン !! エントリー
No.16　高橋舞（レッツ利用者）
https://www.youtube.com/watch?v=Midg1NomR6o&t=83s

参加者 (支援員)：
3 人の中心の方の衣装の色に引き込まれました。他の方も引き立たせている。3 人だけでも、表現者なのに、背景の数名で真ん中の赤いドレスの人がひき立つように見えました。

参加者 (支援員)：
自分たちでも集団で活動するときに、各々に楽しみ方は変わっても、それぞれに楽しんでいるのかな。うちでもあるよなと思いました。それを私たちが表現活動として受け取ってあげる。そうするとご本人の幸福度が変わってくるのかなと。

坂：捉え方によって色んな見方があるんだなと思いました。

参加者 (障害当事者)：
言葉にならない音が、表現未満が表現になった瞬間だったなと思いました。

ふ：動画を見て高橋さんがこんなにパフォーマティブなことができるんだ、とびっくりしました。この当時は私はまだスタッフではなかったので。高橋さんは普段から雄叫びを上げているんですが、普段の雄叫びと全然違って。スタッフが音楽的な関わりをすることで、不思議なことになってますね。

③「地獄の底から」
さけつ Youtube チャンネルより
https://www.youtube.com/watch?v=FNyVDfeY5O0&t=38s

④ニッチとサッチと七色の風
https://www.youtube.com/watch?v=zhxo4GgMzQ8
※当日は同曲の別の動画を使用しました。2 曲目の曲です。

参加者（大学教員）：
彼自身がステージ上で歌って踊っても面白いだろうと思いますが、この動画の炎が映ったり、お料理しているところが映ったりしている構成は誰が考えているんですか？素晴らしいと思います。ぜひ本人に会ってみたいです。

坂：この動画の構成は本人がされていますね。動画編集はお母さんがされているとか。さけつさんは Youtube チャンネルを持っていて、他にも朗読のものなどありますので、ぜひ検索してみてください。

参加者（福井芸術文化フォーラム職員）：
「佐渡」という言葉がでてきましたね。自分の思い出の言葉が歌われているんですかね。

角地（NASC）：
新潟の浜辺からは佐渡が見えるんですよ。福祉に携わっている人々の中にある心象風景が歌詞になっていると感じました。

参加者 (静岡県障がい者芸術文化支援センター職員)：
歌を聞きながら、この二人の関係性が気になりました。

-　　終了

純粋に パフォーマンスを 楽しむ日

期　　日：2022年3月12日（土）13：00～15：30
会　　場：竹島園地公園（愛知県）
主　　催：あいちアール・ブリュットネットワークセンター、東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
後　　援：蒲郡市、蒲郡市教育委員会
来場者数：約1,000名
出演者　：ⅰ　hiro to hiro（愛知県）
　　ⅱ　瑞宝太鼓
　　（長崎県：社会福祉法人南高愛隣会）
　　MC：まなミネぴかりん

あいちアール・ブリュットネットワークセンターの小田センター長（社会福祉法人楽笑理事長）より、令和2年の冬頃に、令和4年3月ぐらいに新型コロナウィルスもある程度収束していることを見越して、バーンと舞台芸術を楽しめる何かをやろうよと相談を受けました。コロナ禍の影響で取り組みが低調となっていた舞台芸術ですが、この事業を通じて巻き返しをしていきたいと話をもらいました。参加者それぞれが制約なく自由に楽しんでもらえる機会になるよう事業名を『純粋にパフォーマンスを楽しむ日』と名付けました。

　準備を本格的に始めた令和3年12月頃は、新型コロナウィルスの感染も収まっており、当初の目的通り舞台芸術を盛り上げていくきっかけとなるようなプログラムを企画していきました。令和4年1月。年が明けると風向きがガラっと変わりました。新型コロナウィルスの感染者数が連日過去最高を記録し、実施に向けての協議が日々続けられました。不安とモヤモヤを抱えながら、時間が過ぎていく中で内容を一部変更して実施することになりました。小田センター長の『例え緊急事態宣言が発出されても実施する』という声が大きな後押しとなりました。

　当初の予定との大きな変更点は会場でした。屋内施設での開催を予定していましたが、風通しの良い屋外で実施することに。選ばれた会場は竹島園地公園。蒲郡の景勝地である竹島を背に公演を行うことになりました。雨天時の代替会場として、すぐ近くにある蒲郡クラシックホテルバンケットホールも抑えました。こちらも入っただけで緊張感の走る素敵な会場でした。

　3月7日（月）に小田センター、音響を担当してくれる清田さん、出演予定のhiro to hiroのお2人で会場の下見に。天気はからっとしていましたが、強風吹き荒れる1日で、あらゆるものが空中を舞っていました。天気予報では本番12日（土）の予想気温は24℃、小田センター長と清田さんが組んだイベントでは、雨が降ったことがないとのことでしたが、凍える一行は一抹の不安を覚えました。

　3月11日（金）12：00頃に新潟組は蒲郡駅に到着しました。降りて気づいたことは蒲郡市が映画『ゾッキ』のロケ地だったこと。寝袋を買いたくなりました。集合場所である『〇〇すぎるパン屋・じばカフェ』（社会福祉法人楽笑）に移動するためタクシーに乗りましたが、店名を言っても全然伝わらない。運転手に住所を伝えてもそんなところにパン屋はあーへんと言われましたが、とにかく行ってくれと。走ること10分。眼下には見事パン屋が。運転手は『ほっか、ばあばあ人がおるパン屋じゃん。』と言って去っていきました。

　店舗に入ると天井が高く気持ちの良い日差しが注ぐ空間が。カフェを利用したりパンを買いに来られる方が続々と入ってきます。そこに午前中に指導監査を終えた小田センター長が合流。一言、社会福祉法人化1年目の監査はキツイと。瑞宝太鼓の岩永さんから連絡があり大阪で渋滞にあい合流が遅れるとのこと。先に昼食を食べることにしました。メニューを見るとチキンカツ定食、照り焼きチキン定食・・・・・肝焼き定食！明らかに清潔感ある空間に、煙をモクモクと漂わせそうなひときわ目立つメニューが。小田センター長曰く、怪しい居酒屋のメニューを引き継いだとのこと。頼むしかありません。レバーだけでなく様々な鳥の内臓部位をいただきました。次に来る時にも同じものを頼むと思います。

　瑞宝太鼓のメンバーが到着し昼食後、全員で会

場の竹島園地公園に徒歩で向かいました。新潟とはまったく違う穏やかな気候の中、波のない三河湾に浮かぶ竹島が見えてきました。思い出の風島弁天を思い出します。ステージを確認すると芝生はしっかり固まっていて、太鼓を置くのも問題なさそうでした。翌日の天気予報は晴天。風が少し強まる予報も出ていましたが、無事に公演を迎えられるはず。

晴天となった12日（土）。午前8：00から会場設営が始まり太鼓や立ち位置の確認を行いました。太鼓の運搬については手伝おうにも、よく分からないとの見るからに重そうだったのでやめました。予定よりもちょっと遅れ午前10：30頃にリハーサルを開始しました。司会は、『最も自由な人たちVOL.08』、『Do It !!』に続き、まなミネぴかりん。認定NPO法人ポパイ所属。ぶっ飛びながらも気配りトークのまなみん、心優しき揉めごと嫌いのミネミネ、一応きちんとやろうとするぴかりんによる司会ユニット。たまに露わになる崩壊も見どころです。東海・北陸ブロックのイベントではすっかりおなじみになりました。ミネミネさんもお気に入りの騎手が蒲郡市出身とのことで機嫌が良さそうです。

まなミネぴかりんの本番さながらの司会トークに合わせ、音響の清田さんが公園内を動き回ってマイクのチェックをしてくれました。オーバーアクションで、めちゃくちゃ目立っていました。

瑞宝太鼓のリハーサルが始まると、どこからともなく観客が集まってきました。集まるというよりも押し寄せてきました。芝生に座って聴いている方、リズムにのって踊っている方、撮影している方、乗っていた自転車を横倒しにして何やら歌っている方など、400名近い方が楽しんでいました。曲が終わる毎に大きな拍手が起こり、本番さながらのリハーサルでした。

開園直前になると、更に観客が増え賑やかになりました。それと同時に強風が吹き荒れ、瑞宝太鼓のグッズコーナーが吹き飛び、hiro to hiroの譜面台と帽子も真横に飛んでいきました。より厳重に楽器を固定し、定刻通りのまなミネぴかりんの司会でスタート。まなみんの『come here!』の掛け声で、hiro to hiroが入場。初ステージが、500名を超える観客の前となりました。

高次脳機能障害を負ったボーカルのhiro（宏文）とその歌声に様々な楽器を用い、メロディーを添えるhiro（廣中）。強風の中、2曲を歌いあげ盛大な拍手がこだましました。一時は生死をさまよったhiro（宏文）。地元蒲郡市で復活を遂げました。

続いて瑞宝太鼓。太鼓の音が鳴り響くと、通りがかりの観光客も足を止め、そのまま芝生に座り出しました。出入り自由の催しですが、出がなく観客が絶え間なく増えていきました。太鼓の音色に様々な方がリズムを刻み楽しんでいる様子でした。

後半は、太鼓のワークショップを行い親子で実際に太鼓を叩いてみました。瑞宝太鼓の団員のリズムに合わせて参加者が太鼓を鳴らすのですが、動作はかなりハード。徐々に難易度が上がっていき、大人は息切れをしている方が多数いました。団員の方々は毎日トレーニングしているだけあって、余裕の表情。春の日差しの中で、老若男女問わず運動ができました。

最後の締めで、ぴかりんさんがミネミネさんに今日の感想を聞くと「長すぎる。早く終わってほしいですよ」と、朝とは違って露骨に不機嫌に。会場も笑いに包まれました。ミネミネさん、時間ぴったりの終了ですよ。

相談支援

YOHKO さんの相談支援専門員が見つかる

相談担当者：坂野　健一郎

令和4年3月中旬。激震が走るニュースが飛び込んできました。なんと YOHKO さん自らが動き、相談支援専門員（以下相談員）とつながったとのこと。これから、サービス利用に向けて相談員の方と事業所を回るそうです。

YOHKO さんは、この広域センターの過去の報告書にも何度か出てくるパフォーマーで、徐々に活動の範囲を全国を侵食しつつある方です。新潟県内の障害福祉関係者には抜群の知名度をほこっています。広域センターでも2018年に実施したパフォーマーオーディション『あしたの星☆2』で YOHKO さんにカオス賞を授与したことから電話相談が始まりました。3年間で延べ 1,500 回を超える相談をいただいていましたが、果たしてこれは表現活動に関わる相談なんだろうかという疑問と、正直話に飽きてきてこれ以上親身に話を聞くことができないなということもあり、そろそろ卒業してくれないかなと思っていました。

YOHKO さんの相談の趣旨

- 舞台発表の機会がほしい。
- 舞台発表を通じて過去に自分に様々なレッテルを張った人を見返したい。
- SNSなどで私を紹介してほしい。
- 話を聞いてほしい。

初回相談日：平成31年2月
相談延べ件数
平成30年度：166件
令和元年度：422件
令和2年度：450件
令和3年度：503件

支援センターのこれまでの対応
- 電話、メールでの対応
- noteでの相談記録の公開
- 舞台発表の機会の紹介
- 講師の依頼

相談対応の悩み

- 関わることでYOHKOさんの暮らしに何か変化があったのかがよく分からない。
- 相談内容として舞台芸術に関わるものはほとんどなくなってきているため、支援センターとして対応する必要があるのか。
- 日時生活においてトラブルを起こす度に支援センターへの相談が増える。距離的に近い相談員につなぐ必要があるのでは。
- 馴れ合いになりお互いにリスペクトのまなざしを向けられない。

きっかけは、スタ☆タンZ!!
― Across the chaos ―

令和4年3月1日（火）にスタ☆タンZ!! ― Across the chaos ―を新潟市で開催しました。YOHKO さんもまるでゲスト枠のような立ち振る舞いで参加していました。本来のゲストであるクリエイティブサポートレッツの久保田さん、曽布川さん、高木さんにもからみにからみ、催しが終わっても中々帰ろうとしませんでした。

スタ☆タン!!終了後の情報交換会で、久保田さんから『今、支援センターで YOHKO さんからの様々な相談を受けている状況だけど、距離的にも近い場所で相談員がいた方が良いよね』とアドバイスをもらいました。我々との関わりの中でさえも年に数回トラブルがあったことから、誰か間に入ってくれる方がいると日常生活もスムーズに送れるだろうなという議論は我々も続けてきました。ただ、つないだ先に一生恨まれる可能性もあることを考えると躊躇していました。YOHKO さんをつないだことで、年間 500 件近い相談が届いたら申し訳ないなという思いがあり行動を躊躇していました。今回、久保田さんからやらなければいけないごくごく普通の対応を進められ、行動に移す決心をしました。

YOHKO さんへの伝達

3月3日（木）。YOHKO さんからいつも通り午前10時に電話がかかってきました。意を決して、YOHKO さんに4月1日以降、私は電話に出ないこと、施設の利用や相談員とのつなぎのお手伝いをする旨を伝えました。「嫌です、電話に出なくてもかけ続けますから。」といった反応だったので、施設を利用すること自体はどう考えているのか聞いてみました。パフォーマンスを仕事にできたり、毎日通うことが強制でなければ行ってみてもいいかもといった反応でした。意外な反応に、個人的にも施設に通うことは収入の確保や地域とつながるという意味では賛成だということを伝えました。また相談員がつくことで、支援センターと連絡する時にトラブルも起きにくくなるのではと伝えました。すみません、うそです。正しくは、私は4月1日以降は電話に出ないので、支援センターに電話をするのであればトラブルになった時にすぐに対応できるように相談員をつけてほしいと言いました。実際、私も新しい仕事も兼務することが決定し物理的に電話に出れなくなるのは事実でした。YOHKO さんからは、「今までのトラブルは本当に後悔しています。本心です。信じてください。おかしかったんです。それを考えると間に入ってくれる人がいたら良かったと思います。これまでの人生、トラブル続き。でも YOHKO 様は妥協したくない。妥協しないからみんな避けていく。YOHKO 様にビビッて何も言えない輩を相手にできるかよ。問題行動女のレッテルを貼られ…。」話が長くなりそうなので、相談員をつけることに対して改めてどう考えているか聞きました。「トラブルが減ったり、問題行動女のレッテルを貼ってくるヤツとあっても落ち着いていられるかもしれない。間に入ってくれる人はいるかもしれませんね。でも坂野さんに相談できないのは嫌です。宣言しておきます。かけ続けますよ。でますよね？きっとでますよね？」私からは、かけ続けたところでませんということ、とは言っても妥協点を見つけていきましょうということを伝えました。

支援センターとしてどこまでやるか

3月10日（木）。アートディレクターの角地さんが広域センターの事務所に出社していました。スタ☆タン!!Z後のＹＯＨＫＯさんへの対応を伝え、対応を検討しました。議論になったのは支援センターとしてどこまで対応するかということでした。改めて相談支援とは何かを考える時間となりました。私はあくまで情報提供や知り合いにつなげるまでの対応で、相談員との面談や市役所、施設への同行はやりたくないと角地さんに伝えました。角地さんからは次のように言われました。「同行しないときっと解決しないですよ。そして同行した方が早いです。これまで3年間対応してきたからこそいくべきですよ。」正直な話、このことは薄々分かっていました。ただ気がのらなかったのは、ＹＯＨＫＯさんと合うと体力がゴリゴリ削られることだけでなく、支援センターとしてここまでやるべきか躊躇していたからです。ようやく決心がつきました。

YOHKOさんの目覚め

3月18日（金）

その後も毎日のようにYOHKOさんから電話がありました。やっぱり施設を利用するのは嫌だ、いややっぱり利用したい、週1日だけ施設を利用したいなどやり取りをしていました。

3月18日は出張で特急電車に乗りつつYOHKOさんに合いそうな知り合いや施設をピックアップしていました。そのタイミングでYOHKOさんからメールが届きました。事前に出張の日を伝えておくと電話はかけてきません。メールを読んで驚きました。そこには相談員を見つけ、興味のある施設に電話をかけ、すでに相談員と共に見学に行く日程調整をしていることが書かれていました。施設に電話をした時に責任者から「私は、前例がないという言葉が嫌い」という話をされて感銘を受けたとのこと。その続きには『4月以降、坂野さんは別部署の仕事もあるため電話にでないと思った方が良いとのことですが。相談員が月に1回のモニタリングに来た時に、相談員から坂野さんに電話してもらって途中で変わってもらい、元気で今ここでやっていますみたいな話ができればいいですよね。』と記載がありました。4月以降の対応の妥協点をお互い見つけていく中で、YOHKOさんの提案は私の腹案よりもずっと良いものでした。月に1回のモニタリングをやってくれる相談員はまずいないので、あって年3回ぐらいの近況確認かと思っていたところ見知らぬ番号からの着信がありました。電話に出るとYOHKOさんの相談員になる予定の方からでした。相談員の方からは、施設見学など実際に動き出すのは4月中旬からGW当たりを予定していることを、月に1回モニタリングを行うことを仕事のモットーにしているということをお聞きしました。施設の見学などへの同行もお願いしたいと話がありました。私からは、心からの御礼と真の勇者だということを伝えました。月に1回のモニタリングについては、相談対応の密度の濃さに驚いていることと、くれぐれもこちらへの電話は必須ではないことをお話ししました。相談員の方からは、相談がなくなって寂しくありませんかと聞かれたので、まったくもってそんなことはなく、区切りとして『さよなら、坂野会』を自作自演で開きますよと伝えました。

今回の行動を見て、いつも通り破天荒な動きはありましたが、YOHKOさん自身も変わらなきゃと考えていたんだなと思いました。

令和3年度のやりとりはここまでです。今回の対応が正しかったかどうかを判断するにはもう少し時間がかかります。うまく施設がフィットした場合は、支援センターとYOHKOさんの関りは月に1回のモニタリングでの近況確認、時々行われるステージ発表の機会で顔を合わせるぐらいになると思われます。そうなった時に、支援センターに寄せられる年間の相談延べ件数は間違いなく減るでしょう。

一方で、施設の活動がYOHKOさんに全く合わず、他の利用者の方との関係もボロボロ、相談員の方との信頼関係もめちゃくちゃになったとしたら、年間の相談実績は増えるかもしれません。支援センターとして、言葉は悪いですがYOHKOさんに施設利用をけしかけた責任もあります。私は電話にはでませんが。令和4年度は相談延べ件数が減ることを1つの目標にしたいと思います。

令和4年3月31日（木）に私からYOHKOさんに次の言葉を送りました。

YOHKOさん、今まで本当にありがとうございました！YOHKOさんのマネージャーやプロデューサーだと勘違いされる日々も今日で終わりです。

蝶のように舞っているつもりが逆に蝶を裸足で踏みつぶし、蠍のような毒針で刺してくる方でした。

春は別れの季節。明日からは予告通り電話にでません。もう一度言います。電話には出ません。同行支援に行くことは約束します。さようならYOHKOさん。

その返信

まあ、もともとオタク入っているYOHKO様だから、大丈夫だとは思うけど、坂野さん的には人と絡んでコミュニケーションしてた方が健全？それとも何かノルマかミッションを私自身にのめりこんで静かにしていたほうがいい？っていいったら、前者ですかね（・ω・）⁉？電話は続けます。予告します。出ないと言いつつきっと嫌でも電話に出ることになりますよ。

予言でしょうか。脅迫でしょうか。

※本人に本文の掲載の許可はとっています。

評価

評価委員会の開催 ―5年目の声―

日　時：令和4年3月18日（金）13：30～16：15
会　場：カネジュービル会議室（愛知県名古屋市）
出席委員：垣尾 良平 氏（中日新聞社会事業団常務理事：愛知県）
今泉 岳大 氏（岡崎市美術博物館学芸員：愛知県）

評価委員会は、広域センターの実施した事業の成果や課題を客観的に判断してもらえる機会としてとても重要な事業です。垣尾委員、今泉委員には広域センター開設当初から評価をお願いしており、そのアドバイスがこの間の事業に反映されています。緊張感があり、事前配布資料にも漏れなく実績の記載があるかドキドキしますが、この過程があるからこそ年々評価を意識しながら事業を実施できるようになっています。

令和3年度は、コロナ禍の影響もあり事業の現場にはお招きすることができませんでしたが、全15,000文字の資料をチェックいただき忌憚のないお話をいただきました。

良かった点

・全8県で支援センターが設置されたこと。
・各県の状況を把握していること。
・人材育成や情報共有をこまめに行い中間支援組織としての役割を果たしていること。
・コロナ禍にも関わらず概ね計画通りの事業が実施できたこと。
・舞台芸術に関わる事業が実施できていること。
・商用化・オンライン配信など新たな相談の傾向がつかめていること。
・発達障害のある方など支援センターのユーザーが増えていること。

課題

・支援センターの機能強化のために学びの場だけでなく、事務や広報など実務的な支援も必要なのではないか。
・個別の事例についてはどんどん情報を積み上げ、共有と検討を行うと相談対応のノウハウを蓄積できるのではないか。
・ユーザーが多様になっていることから、困難事例があった時に専門職に相談ができる体制整備が必要では。
・商用化の相談が増加傾向であることから、ブロック内で年度毎のフリー素材を集めたら如何か。直接的な対価にはつながらないかもしれないが、この活動を広げていく上では有効ではないか。
・作家が亡くなることで作品の所有権が不明確になっている事案もある。作家の生前中に作品を所蔵し管理する仕組みが必要ではないか。
・令和3年度は新型コロナウィルスの影響もあり、ブロック内の展示等に伺えなかった。令和4年度は積極的に事業に参加したいので都度連絡をほしい。
・全県で支援センターが設置されたことから、広域事業の向こう5年の中期計画を策定するべきではないか。
・新しい事業は事業として、これまで継続してきた定期的な会議や研修会には引き続き注力してもらいたい。

最後に垣尾委員から、この5年間を振り返りつつ次の言葉をいただきました。

「年度ごとの事業を見れば、それは課題はいっぱいあるよ。少なからず新しいことをやっているんだから完璧にはできない。けどこの5年間ってスパンをみるとよくやったと思うよ。2017年度に広域センターが設置された当時なんて、支援センターをやっている県がほとんど空白で。どうやって各県で支援センターを設置していくかの議論に頭を悩ませていただんだから。今は、個別の相談事例まで検討できるようになったことをみると感慨深いものがあるよ。事業の性質が様変わりしている点で、ちゃんと成果は出ているんじゃないの。」

5年間、広域センター事業を見ていただいた委員の方からこうした評価をいただけたことは率直に嬉しかったです。1年ごとの事業を振り返ると、もっとやれたと思うものが多く力不足に落ち込むことも多かったのですが、5年間という期間で総合的に事業の評価をいただけたことに自信が持てました。その後も、垣尾委員、今泉委員から様々な情報をいただき閉会となりました。

今後の展望
事業内容の転換

広域センターとして、これまで各支援センターのニーズ把握と支援センター同士のネットワーク化を重視して事業運営を行ってきました。令和3年度に東海・北陸8県全てで支援センターが設置され、ブロック会議・研修も恒例の事業となったので、ある程度ニーズ把握とネットワーク化を強化する仕組みは整ってきたと言えます。

一方で相談支援における課題や、必要性は訴えられていても中々取り組みが進んでいかない事業があります。相談支援においては、先に紹介したYOHKOのように彼女を受け入れてくれる福祉事業所はないだろうという先入観から、相談を受け続けてしまった実例があります。本来であればYOHKOさんが安心して関われる先を探し、より良い暮らしの実現につなげていくことを優先させるべきでした（安易に関わろうとして痛手を負った方がいるのも事実ですが）。この4年間、広域センターと関わったからこそYOHKOさんの表現活動のフィールドは広がりましたが、福祉的な支援を受けられる体制はほぼ変わらずでした。結果論でしかありませんが、この間に福祉的な支援ともっと早くにつながっていれば安定した生活が送れていたかもしれません。広域センターとしての負担も増すばかりでした。この1件から改めて相談支援の大切さと難しさを痛感したとともに、福祉制度の安心感・信頼感を強く感じることができました。今後は、相談支援においてもより福祉的な専門性のある方とつながる必要があります。

相談支援のもう一つの観点は、内容が多様化しているということです。特にSDGsの推進から、障害のある方の表現を二次利用したいという相談が増えています。グッズの制作や絵画のレンタル、複製などの用途に合わせ、対価や依頼主などの要素を加えると多種多様な対応が必要となっています。二次利用だけでなく、原画の販売といった相談も増加傾向であり、作家の権利を守りつつより豊かな生活の実現につなげていくチャンスとなっています。残念ながら良いことばかりでもなくトラブルも起きています。二次利用については、特に最初の契約段階での条件の認識の違いや、なし崩し的にできていく依頼者からの後付け条件が大きなトラブルにつながっています。作家の不利益にならないよう権利をしっかり守る役割が広域センターに求められています。

表現活動の幅を広げる上で、舞台芸術の推進は必須であり、支援センターの基本業務の1つとなっています。コロナ禍の影響もありましたが、美術分野と比較すると取り組みが遅れ、まったく事業を行っていない支援センターもあります。事業に踏み切れない理由として、そもそも何をして良いか分からないということが挙げられます。その際に指導者がいる、もしくは指導者とつなげてくれる方がいることで、その後の取り組みは大きく違ってきます。広域センターとして舞台芸術の専門家とつながり、定期的な支援センターへの支援が必要となっています。

取り組みが低調となっているものの一つに、様々な方が文化芸術を楽しむための合理的配慮に関わる事業が挙げられます。展示会や舞台の場だけでなく、会場にたどりつくまでのアクセスや広報の方法など、ノウハウを積み上げていく必要があります。事業の準備の多忙さでおろそかになってしまう部分であり、事業計画の段階から合理的配慮を検討していく意識づけが必要です。

何より、こうした事業を少しずつ円滑に行っていくために、支援センターへの後方支援が非常に大切だと痛感した1年でした。様々な事業を実施したくても、人員など体制的な問題で満足な事業展開ができない現実があります。業務のほとんどをワンオペで展開している支援センターもあります。広域センターが直接的な支援で、事業の実施がままならない支援センターの体制基盤を行っていくことが急務です。

支援センターに対する段階的な支援

	1 体制が不十分	2 相談体制が不十分	3 専門的な相談体制が不十分	4 事業の実施	5 専門的な事業の実施
	・人員体制 ・基本業務の理解 ・情報の受発信 ・ネットワーク ・ハードの整備 ・内部連絡ツール	・対応方法の整備 ・スキル・知識 ・経験 ・訪問調査 ・記録 ・各種様式の整備	・福祉制度 ・文化芸術 ・権利保護 ・合理的配慮 ・事業企画 ・専門家との連携	・相談支援 ・美術 ・舞台芸術 ・人材育成 ・ネットワーク化 ・情報発信	・新機軸の事業 ・予算の確保 ・人員の確保 ・合理的配慮 ・情報の分析 ・政策提言
体制整備	ワンオペを解消する施策 ・事務のフォロー ・支援センターを支援するネットワークの構築 ・情報発信の仕組みの構築 ・相談対応のノウハウの共有			事業運営	専門家の派遣 ・福祉的な対応 ・舞台芸術 ・合理的配慮 ・権利保護

おわりに

令和3年度の報告書も非常に文字数の多いものになりました。写真や図がページに占める割合は年々減っている気がします。これは、冒頭にも書きましたが広域センターの役割・性質が徐々に変わってきているからです。

この2年、広域センターの事業は展示会や各県への巡回など直接実施するものが減り、支援センターの現状や課題の把握、その対応にシフトしていました。ブロック会議の場では、コロナ禍の対応や事業に関わる財源、新たな相談対応などとても生々しい議論が行われました。各支援センターごとに、この事業にかける思いや考え方が様々あり、一つの方向性にまとめるよりも、その違いを捉えながら何をするかを考えてきました。

美術分野が得意なところもあれば、舞台芸術に強い団体もある。支援センターの規模が小さければ小さいなりの事業計画の立て方があり、予算が多くても小回りがきかないなどの困りごとがある。その議論の内容を報告書に記せたらとても面白いものになるだろうなと思いつつ、自由な意見交換が阻害される可能性もあるのでやりません。

違いは時と場合で強みになったり弱みになったりするので、その都度の検証が必要となってきます。令和3年度は、多様性を認めるだけでもよくないことが分かりました。やるべきことにはしっかりと行動を促していく必要性を感じました。その地味で地道な作業を続けてきた分、報告書からも絵がどんどんなくなっていきました。

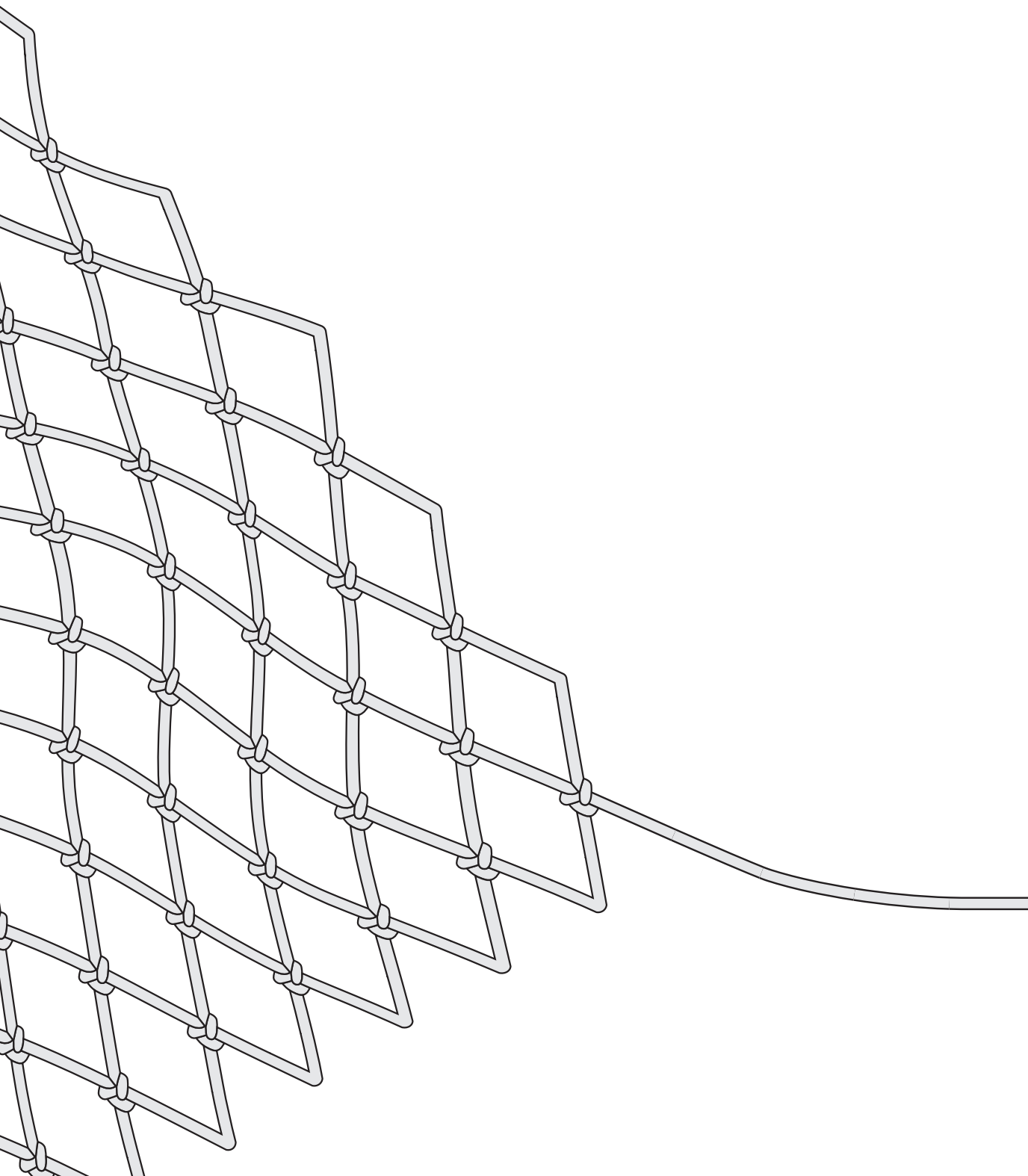
全国連携事務局との関わり方が明確になったことも、報告書の内容の変化の一因として挙げられます。全国連携事務局が、毎年度とても丁寧な全国の広域センターも含め、支援センターの事業報告書を作成してくれます。それぞれの支援センターの特徴や注力した事業の詳細が分かりやすくまとめられていて、改めて広域センターの報告書に支援センターの紹介を掲載する意義は薄れました。報告書の作成一つをみても、広域センターの役割の変化が見られます。

その分、この報告書に何を掲載していくのか。今回は、次年度以降も広域センターとして継続して注力するべき内容のものを掲載しました。

これからも、できなかったことはできなかったと、効果のなかったことは効果がなかったとして、やったことに対しても誇張せず地味で地道な作業を続けていきたいと思います。

発行日 2022 年 3 月
企画・編集・発行
社会福祉法人みんなでいきる

発行責任者：大島 誠（社会福祉法人みんなでいきる代表）
文章：坂野健一郎
写真：坂野健一郎 他
デザイン：小出真吾

東海･北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
〒943-0834
新潟県上越市西城町 2-10-25-307
社会福祉法人みんなでいきる 内
TEL：025-530-7264
FAX：025-530-7261
MAIL：info@niigata-artbrut.net
HP：http://niigata-artbrut.net/

本書は厚生労働省「令和 3 年度　障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環として制作しました。